



三輪田めぐみは 1989 年兵庫生まれ、京都嵯峨芸術大学を卒業し、幾つかのグループ展と個展を経て現在に至る。今回三輪田は 5 点の大型作品と 2 点の小型作品を展示した。いずれもキャンバスに油彩である。

まずはその巨大な油彩画である。画面一杯に、様々な人々の営みが描かれている。この大きさを描き切れるだけでも、作品を描く意味が生まれると言うことができる。器用に薄塗りもせず、気張って厚塗りもしない画面には好感が持てる。慎重でも大胆でもない描き方には、描く者の決意を読み取ることができる。

次に、ここに描かれる情景を考察する。P・デルヴォー、E・ホッパーのように、時間と空間が無化され、幻想的な世界観が構築されている。または、日影眩が近年アメリカで描いている人物にも近いということが出来る。不気味な透視遠近法は、ヨーロッパ中世にまで遡ることが出来るであろう。

通常、批評で「誰かの作品に似ている」という時は、2つの意味を持つ。一方は美術史の文脈に埋め込むためのポジティブな発想である。歴史に準じ、価値と意味がある作品であることを示す方法論だ。他方では、オリジナリティがないというネガティブな意味を伝える場合である。先人の

作品を乗り越えていない、何処かで見たことがあるという暗黙の了解だ。私は今回、この両者の意味でこれまでの作品を引き合いに出しているつもりはない。私はそれだけ、私にとって三輪田の作品とは可能性が秘めていることを表したいだけのことである。

その可能性とは、小品にこそ明確に表れている。ここに描かれているのは行為でも情景でも幻想でも動作でもない。ある不確定な「状態」なのである。その「状態」は可視/不可視されることに恐れず、懇々と具体化されることを待っているのである。「希望」とは望みをこいねがい、「期待」とは時期を待つことである。三輪田の作品には「期待」がある。私は、ここに注目と期待を込めたいのだ。

